

瀬戸内海の両墓制を訪ねる旅 20年前の島の墓地の写真をとてがかりにして

経済学部 稲田道彦

死者をどう処遇するのか

今までに死んだ人の数は現在地球上に生きている人の数よりも多いです。私たちは死者の作った歴史に自分たちの生きる世界をつなげて生きています。今の社会は私たちが作っているようでも死んだ人の作った社会の影響を受けています。今を存分に生きていると思っている私たちの誰にも死は確実に訪れます。

島に行って、生きている人が死んだ人をどのように扱ったのかを考えようとしています。

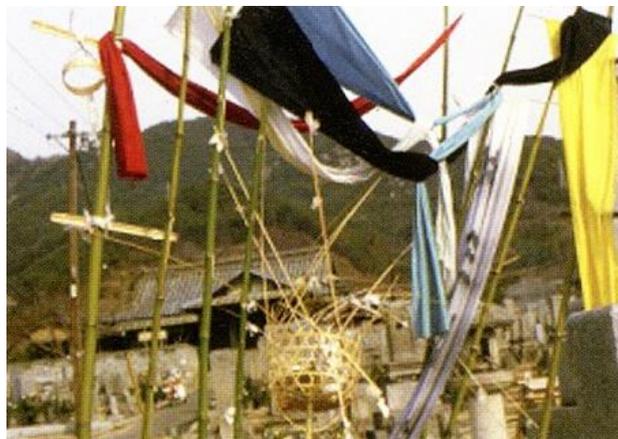
人が死ぬと、遺体が残されます。身近な人にとって肉親の遺骸は哀しく愛おしい存在です。思い出とともにいつまでも身近に感じていたいと思います。なるべく長く一緒に時間を過ごしたいと考えます。

一方、他人にとって死体はやっかいです。そのままにしておくと腐って異臭を放ち姿を変えていく。なんとか早く自分たちの生活圏から姿を消してもらいたいと考えます。

死者は身近に感じていたい人と、早く見えなくなってもらいたいという人の相反する意識を反映して、死者の扱いが定着してきました。どう扱うかという方法は他方で緩やかに変化しながらも地域で保持されてきました。

人々の死に対する意識をのみこんできたのが墓地です。誰もの気持ちを納得して受け入れるように、どういう墓地を作るかという文化が長い間に人々によって作られてきました。その中に両墓制という制度があります。

この本には 20 年以上前から撮りためた島の墓地の写真を掲げます。今の姿を見ることによって死者たちの現代を考えてみてください。



小豆島松風庵 1984

瀬戸内海地方の両墓制

両墓制の起源は不明です。江戸時代よりもっと前の習俗を引き継いでいるのかもしれませんが。両墓制とは一人に二つの墓を作る制度です。それは埋葬墓地と石塔墓地を別の場所に分けて設ける墓地制度です。古い時代の日本人の死体への考え方が反映していると考えられています。腐って異臭を放ちその後、到底人とは思えない姿を呈する死者の肉体を恐ろしい存在と考え、遺棄すべきものと考えたようです。逆に人の霊魂は尊ばれ大切にされる清浄な存在であると考えたからという説で説明されています。霊魂を石塔に依りつかせて扱ったという説が有力です。

墓地の歴史をみると、庶民が石塔を立てるようになるのは江戸時代中盤からと考えられています。

民俗学では埋葬地を埋め墓、石塔墓地を詣り墓と呼んできました。埋め墓は土葬の制度です。現代になり火葬が増え、この制度は日本各地で消滅しようとしています。また地域で習慣として集落で長い間、保持されてきたため日本の各地で独特な墓地制度になり現在に至っています。

火葬が普及し、両墓制を完全な形で保持する地域はなくなりつつあります。



小豆島室生 1984

祀り手のいなくなった石塔を集めてこのような整理がなされています。新しい死者に場所を譲った結果ともいえます。

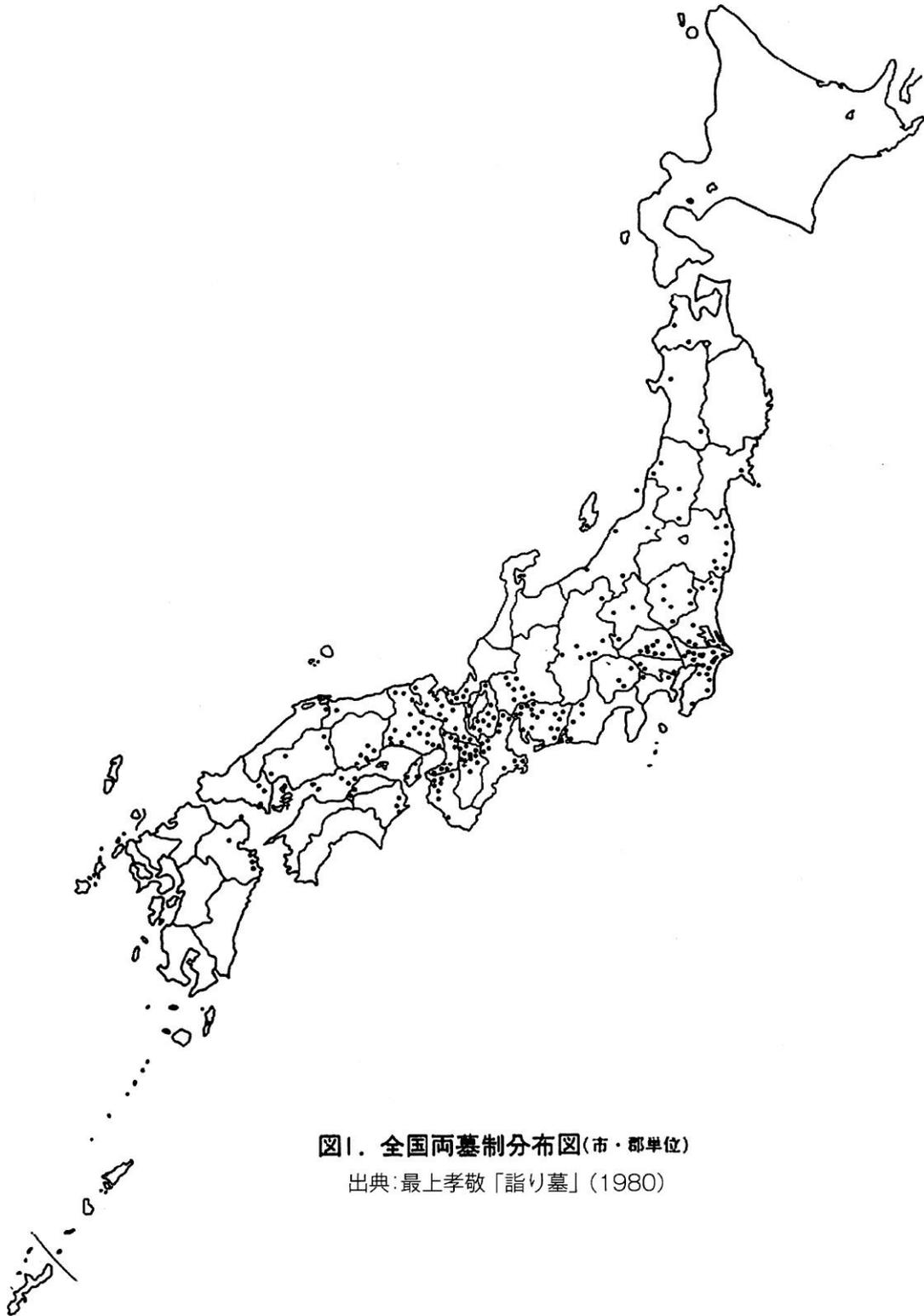
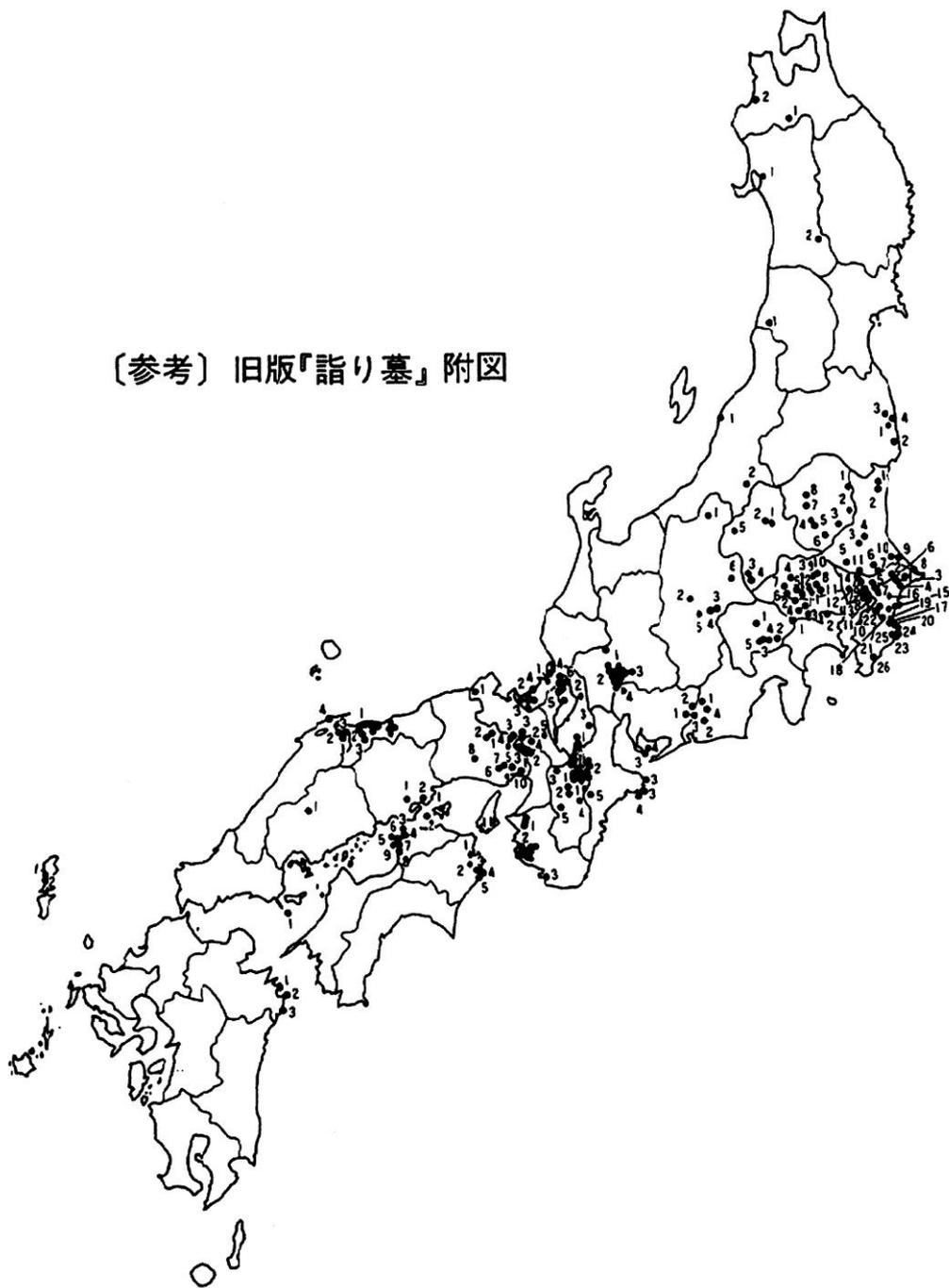


図1. 全国両墓制分布図(市・郡単位)

出典:最上孝敬「詣り墓」(1980)

〔参考〕旧版『詣り墓』附図



両墓制分布図

前のページに引用した図は最上孝敬の著作「詣り墓」の付図です。図1が1980年当時、旧版とある地図が1955年当時の両墓制の分布図です。それ以降両墓制は衰退の傾向にあるので、現在ではもっともっと数は減っています。現在の地図はありません。

2つの図をみると、濃密に分布している地域が関東と、関西にあります。瀬戸内海地域は関西地方の分布の西の端に位置しています。伝播論で言うと縁辺の文化はより変異の度合いが高いのかもしれませんが。

なぜこのような分布になるのか議論はありますが決定的な結論は見いだせていません。両墓制という文化が都などの中心地で発明され地方に分布して行ったという文化伝播論で考察されますが、同じ地域でも隣の集落で全く違う墓地制度をとっていることもあります。文化伝播論のみの説明では説明できません。長い間に集落民が自分たちの文化として変容させながら今に至っているからだと考えます。

自分たちの身近に出現した死者を自分たちの生活感覚に合う方法で作りに上げてきたと言えるでしょう。



小豆島小部 旧埋め墓墓地 1984

墓地を移転した後です。

埋め墓の墓上の設え

詣り墓に造られる石塔は日本全国同じ形式がとられています。しかし埋め墓の構築物は地域によって多様な形があります。

島によって違うこの形は何に由来するのでしょうか？ 島や四国本土には両墓制の埋葬した墓の上にはいろいろな形の構築物が作られます。

主に次のような形が作られます。

家の形

棺を運ぶ時の飾りにする輿の形

竹矢来の垣根の形

三角錐のように周囲から竹や棒や藁を束ねる形

小石を積み上げる形

なぜこのように種類が多いのかは全くの謎です。



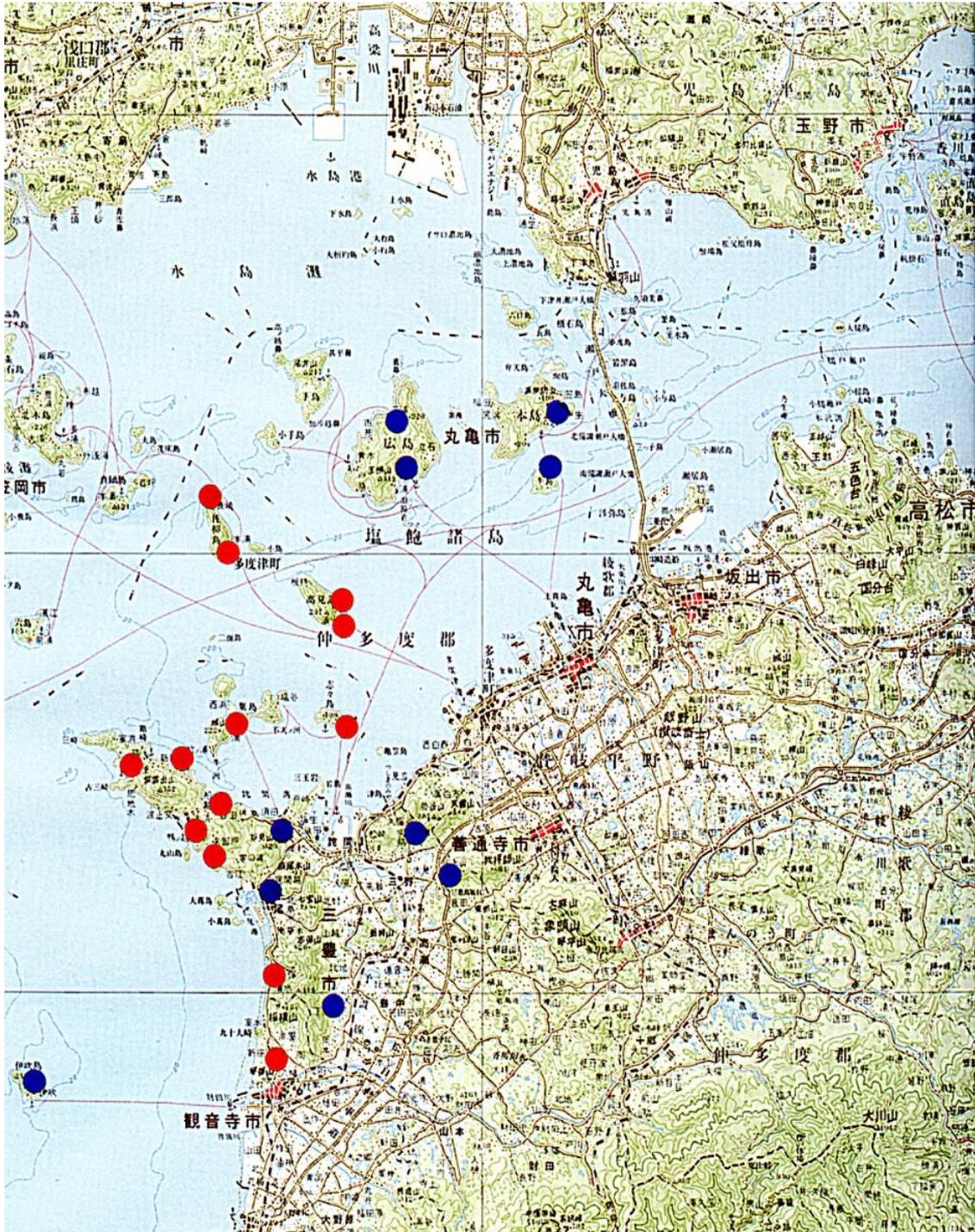
小豆島琴塚 1984

石を組み合わせています。
墓地が改装され、もう見るができなくなりました。



志々島本村 1983

木の家で長持ちさせるためにペンキを塗ります。家が朽ちると撤去され、次の死者に場所を譲ることになる習慣でした。少しでも埋葬者をしのびたいという気持ちがペンキを塗るようになったのでしょうか。前に簾をたらしませます。



凡例

- 現在も両墓制が行われている墓地、または墓地で遺構を見る事ができる。
- 記録等で両墓制が行われたと書かれている場所。現在では遺構もみる事が出来ない。



志々島

港に着くとすぐ目につきます。多くが青く塗られている家型の墓です。簾を垂らすのが特徴です。夏、死者の家が暑くならないようにという配慮でしょうか。中を覗かれないようにという配慮でしょうか。その理由は分かりません。今は志々島で亡くなる人がごく少数になりました。みんな最後は本土の病院で亡くなり、火葬にされ火葬骨で島に帰ってきます。土葬のシステムが壊れています。

人々は火葬骨を習慣通りこの家の下に埋葬します。また子孫が移住先の近くの墓地の石塔の下に納められる例も多くなりました。

石塔は島の中腹の寺院の背後にあります。最近では石塔を立てることが減りました。



志々島本村 1997



志々島詣り墓の石塔 1997



志々島島全景 1984
花を全島で栽培していました。



志々島横尾 1983
埋め墓です。

栗島

栗島の墓は他の島と違って、中央に家型を作り、その周りを廊下（舞台）で囲みその四方に鳥居を設える形で、他の島には見られない形です。

この形から推測すると、棺桶を運ぶときに被せる飾りの輿が変化したのではないかと思われま



栗島潟 1982



栗島潟 1988



栗島灘 1988



栗島旧栗島海員学校 1982



栗島潟 1982



栗島潟 1995

高見島

今も両墓制の墓地を見ることのできる島です。埋葬地には家型の埋葬墓を作りました。集落ごとに浜辺にある埋葬地と寺や堂のそばに石塔墓地を分けて造りました。

浜集落の埋め墓は、道によって埋められる人が分けられている習慣を聞きました。手前に未婚の子供の遺体を葬ります。結婚をしていない子供は三途の川を渡らないでこの世に早く戻ってこられるからという理由です。一段高い奥に石塔が並んでいます。



高見島浜 埋め墓 1983



高見島浜 詣り墓 1983



高見島浦 詣り墓と埋め墓が混在 1984



高見板持 詣り墓 1984

佐柳島

今も両墓制が行われている島ですが、本土の病院で死を迎え、火葬されて島に帰るといふ事例が増え、習慣の変容が迫られています。埋葬した上に石を積み上げて墓を作ります。



佐柳島長崎 1983



佐柳島長崎 1983



佐柳島本浦 1981



佐柳島 長崎 1996



佐柳島長崎 1996



佐柳島長崎 1983

伊吹島

伊吹島では古い文献に両墓制があったと書かれていますが、1980年当時、島で多くの人に聞きましたが、確かに両墓制があったという人に出会えませんでした。あったのかどうか分かりません。ただ島が岩盤でできているため土壌が1メートルもなく、埋葬するには苦勞したようです。石を重ねて墓を造りました。



伊吹島 1988



伊吹島 1988



伊吹島の集落と墓地 1989



伊吹島 1983



伊吹島 1988

小豆島

現在小豆島では両墓制は完全に消えてしまったと言えます。1980年代には最後の姿を見ることができました。見目の埋め墓を地元の人が「ドウガラシテ」と言っていました。胴柄を捨てる所という意味でしょうか。今は死語になってしまいました。

埋め墓は海岸の砂浜にあることが多かったのですが、それは海水浴場と隣接していました。白砂青松の風景の中にありました。その場所を海水浴客に譲り、1980年代には埋め墓を移転させる動きもありました。

琴塚の石組の墓地



小豆島見目 1984

埋め墓ですが、現在は石塔墓地になっています。



小豆島島見目 1984



小豆島琴塚 1984

改装され今はもう見ることはできません。



小豆島小江沖ノ島 1984

豊島

豊島も両墓制は完全に消えてしまいました。埋め墓の改修が行われたからです。1984年の写真は現在「ふれあいの森」になっている場所が墓地だった時の写真です。どのような形で両墓制が展開していたかも含めてよく分からなくなりました。



豊島家浦 1984
特産の豊島石が使われています。



豊島家浦 1984



豊島家浦 1984
寺の背後に墓石が集められていました。



豊島の新しい墓地 1984